

アムスルだより

No.41 2000年 1月12日

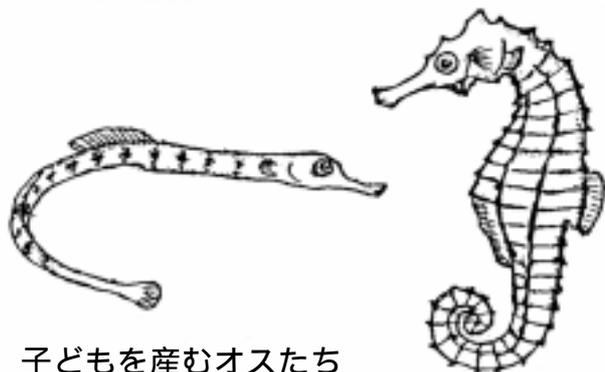
Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/pb3/saburo>

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



子どもを産むオスたち

-ヨウジウオの仲間-

あけましておめでとうございます。
今年初めてのアムスルだよりは、干支えとにちなんだ生き物について書こうと思ひます。「辰年」ですから、もうおわかりでしょう。今回は、ツツノオトシゴ類とその仲間、ヨウジウオ科の魚の話です。

みなさんは、実際にツツノオトシゴの仲間を目にしたとはあるでしょうか。間違いなく魚の仲間ですが、これほど魚のイメージからほど遠い姿をしたものも珍しいでしょう。まず、ふつうの魚と違って、ツツノオトシゴの仲間は、水の中で立ったような姿をしています。動物の姿を考えると、正式には頭から尾に向かう方向を「縦方向」としますから、ふつうの魚は横にたおれた格好で泳いでいるわけです。それに対して、ツツノオトシゴは、頭が上で尾が下で、縦方向に立った状態でくらししているのです。また、ふつうの魚は、背びれ、胸びれ、腹びれ、尻びれ、尾びれの5つのひれをもっていますが、ツツノオトシゴには腹びれと尾びれがありません。胸びれと尻びれも小さなものが残っているだ

けです。ですから、泳ぐのはあまり上手ではありません。そのかわりに、長く伸びた尾の部分で海藻などにつかまり、海のなかや海藻のすき間の小さな動物を食べてくらししています。そのため、口も小さくて細長い形をしています。ツツノオトシゴの尾は、ふだんは前に巻いていますが、器用に動かすことができ、これで頭をかくこともあるそうです。今、世界には2万種以上の魚がいるといわれていますが、その中で尾で頭をかくことのできる魚は、東南アジアにすむ1種と、このツツノオトシゴの仲間だけだそうです。

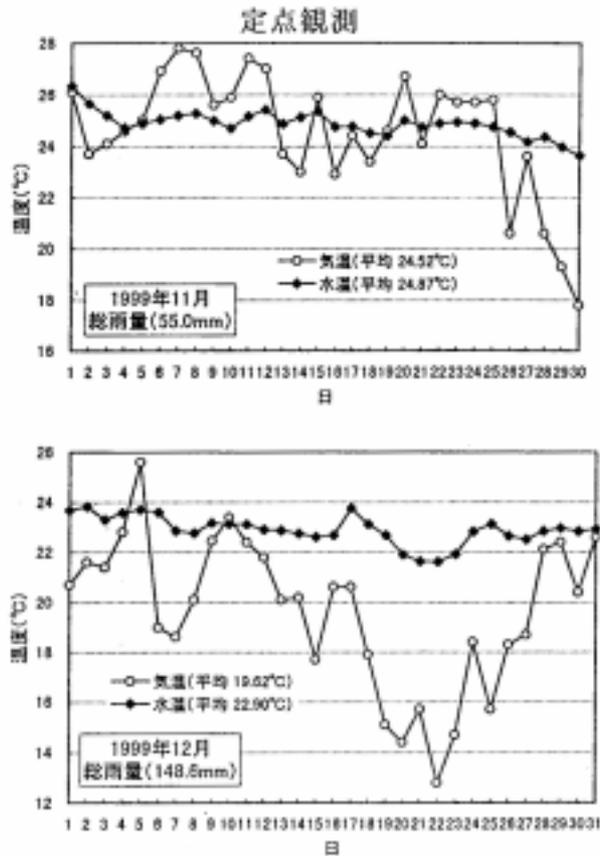
ツツノオトシゴ類は、姿だけではなく、その増え方もとてもユニークです。ふつうの魚では、メスから卵が、オスから精子が放たれ、それらが体の外で受精し子どもが育ちます。中には、グッピーのように体の中で卵がかえり、子どもとして外に放たれるものもいますが、この場合でも子どもを産むのは、やっぱりメスです。ところが、ツツノオトシゴは、オスが子どもを産むのです。とはいっても、オスの体で卵が作られるわけではなく、ちゃんとメスが卵を産みます。少し詳しく説明しましょう。産卵の頃になると、ツツノオトシゴのオスはメスを追いかけるようになり、やがて、ちょうど手をつなぐように器用な尾をからませて泳ぎはじめます。そして、メスはオスの腹にある“育児のう”という袋の中に卵を産

むのです。カンガルーのメスが、おなかの袋で子どもを育てるのととてもよく似ていますが、タツノオトシゴの場合はそれがオスなのです。しかも、カンガルーの袋の中の子どもは1匹だけですが、タツノオトシゴの袋の中では200個くらいの卵が育てられます。そうして、15~20日後、体長1.5cmほどの小さな子どもが産みだされます。子どもたちは、もうちゃんと親と同じ姿をしていて、すぐに尾でものにつかまることができます。

以前、台風の後、オオウミウマ(タツノオトシゴ類)のオスとメスの2匹が、海藻といっしょに阿嘉漁港内に流されてきたことがありましたが、この他に目にしたことがありませんから、阿嘉島のまわりでは、タツノオトシゴ類の数は、あまり多くないでしょう。むしろ、同じ仲間でもヨウジウオの方をよく見かけます。

ヨウジウオの仲間は、“楊枝”の名のとおり、細長い格好をしていて、尾びれがあり、タツノオトシゴ類に比べると、ずっと魚らしい形をしています(腹びれはありません)。オイランヨウジのような色鮮やかなものから、カムリヨウジのようなやや地味なものまで、体の色は様々です。一夫一妻なのか、1匹のヨウジウオの近くにもう1匹いることが多いようです。姿はずいぶん違っていますが、このヨウジウオの仲間も、タツノオトシゴと同じようにオスが、その腹の袋で卵を育てて子どもを産みだします。

海の中には、卵を食べてしまう他の動物たちがたくさんいます。タツノオトシゴもヨウジウオも、その卵をオスの袋の中という、とても安全な場所で大切に育て、少しでも多くの子孫を残そうとしているのでしょう。



阿嘉島の海より

-サンゴの移植実験-

サンゴは1年に1回だけ、卵や幼生を産むことによって子孫を増やしますが、ふだんは出芽や分裂によって増えていきます。ですから、台風などで折れたサンゴも、岩などに固着できれば、そこで増えることができるのです。この再生力を利用して、荒廃したサンゴ礁を回復させる方法がサンゴの移植です。今、研究所では、東京水産大学との共同研究により、どんな方法で移植をすれば効果があるのかを調べるため、阿嘉新港のとなりにあるマジヤノハマでサンゴの移植実験をしています。ダイビングのときやボートのアンカーをかけるときなどは、移植したサンゴを壊さないように注意して下さい。皆様のご協力をお願いいたします。